

<特集>

1970年代のドストエフスキー翻訳  
— 三人称代名詞「彼」「彼女」の意味と用法の変化 —

Translations of Dostoevsky's Works into Japanese during the 1970s: A Change in the  
Meaning and Use of the Third-person Pronouns "Kare" and "Kanojo"

コックリル 浩子  
Hiroko Cockerill  
(クィーンズランド大学)  
(Queensland University)

**Abstract**

Translation of Dostoevsky's works directly from Russian to Japanese began on a large scale in 1914. The established practitioner Nobori Shomu translated *The Oppressed and Insulted*, while Nakamura Hakuyō (1890-1974) and Yonekawa Masao (1891-1965) began their translation careers with *Crime and Punishment* and *The Idiot*, respectively. Three years later Yonekawa translated *The Brothers Karamazov* and in 1953 he published Dostoevsky's complete works. During the 1970s old translations made by influential translators such as Yonekawa and Nakamura were rapidly replaced by new translations. This paper analyses four of these new translations: *Shiitagerareta hitobito* by Ogasawara Toyoki (1968), *Tsumi to batsu* by Egawa Taku (1966-1967/ Revised version 1999-2000), *Hakuchi* by Kimura Hiroshi (1969) and *Karamāzofu no kyōdai* by Hara Takuya (1971). Amongst them, the most interesting translation style was created by Ogasawara, who was one of many contributors to *Kikan Hon'yaku*, and made restricted use of the third-person pronouns.

1. はじめに

雑誌『季刊翻訳』に日本における Translation Studies の萌芽を見る佐藤=ロスベアグ・ナナの論文『共振と呼応—1970年代日本における Translation Studies の芽生え』に啓発され、筆者も本年度の初め日本に滞在した折、国会図書館で『季刊翻訳』の第1号から第7号までを通読した。佐藤=ロスベアグの指摘通り、『季刊翻訳』に寄せられた諸論文には翻訳研究専門誌発行への熱気が感ぜられ、翻訳における「等価」と「対応」の問題や、読者を考えた翻訳という新しい観点が提示されるなど日本に於いて翻訳を学問として位置づけるというにふさわしい内容のことが多い。その一方で、7号で終刊を余儀なくされた『季刊翻訳』にはまた、主に英文学の翻訳者らからする逐語訳、あるいは直訳の否定という意見が散見され、それは翻訳者育成教育において学校文法からの離脱を勧める議論の中で殊に顕著になるという傾向も見られた。また、逐語訳、直訳文体の創始者としての二葉亭への言及が毀誉褒貶すべてを含めて多く見受けられた。

本論では、先ず、『季刊翻訳』における逐語訳、または、直訳への反発、その否定を異化的翻訳の否定と読み解き、さらに、『季刊翻訳』第5号から第7号にかけて連載されたロシア言語学者磯谷孝によるコミッサーロフの『翻訳論序説』を概観する。そこでは、三人称代名詞の翻訳可能性が英露翻訳において最大限であることが示されているので、1970年代のドストエフスキー翻訳文体の顕著な特徴である三人称代名詞の再現率の減少の問題と絡めて論じていきたい。

## 2. 逐語訳、直訳への反発とその否定

1973年4月刊行の『季刊翻訳』第1号の巻頭文を飾った「翻訳の役割」でドイツ文学者の高橋健二は、「翻訳者は裏切り者だ」というイタリアのことわざを引いて、文学における翻訳は科学技術の翻訳と異なり、常に選択を要する翻訳者の主観的な解釈による相対的な作業だと述べる。さらに、原文を裏切る文学の翻訳は、「日本語に対して裏切りの役割をすると同時に、その表現力を新しく豊かに開発する役割をした」とその二律背反性を指摘したあと、二葉亭のツルゲーネフ翻訳について「新しい文章表現として、日本の文壇に大きな影響を与えた」（高橋 1973:3-4）と、文学史的事実を挙げて肯定的な評価を下している。

さて、高橋論文に続く英文学者の別宮貞徳による「翻訳を考える」では、原文を文字通りに逐語訳した訳文を直訳とみなして、その無意味さが攻撃され、無色的翻訳を唱導した野上豊一郎の翻訳論は直訳を理想とするものとして、まったくの「ナンセンスだ」と一蹴される。さらに原文の字句に忠実であろうとした二葉亭の翻訳態度は、「『コンマ、ピリオドの一つをもみだりに棄てず、原文にコンマが三つ、ピリオドが一つあれば、訳文にも亦ピリオドが一つ、コンマが三つという風に』した人もある」（別宮 1973: 12）と、二葉亭の名前をことさら挙げることなく「大へん御苦勞なことだと感心もするが、本質への洞察を欠いて外形だけを真似る愚におちいらなければ幸いである」とその翻訳方法が揶揄されている。では、直訳を否定する別宮にとっての理想的な翻訳とはどのようなものであったか？ この問いに対して、別宮は「……翻訳するとは、理論的に言えば、外国の作家の外国語で考え、言ったことを、日本人たるぼくなら、日本語でどう考え、言うだろうかという方程式を解く作業である」（別宮 1973:15）という仏文学者の平岡篤頼の論を引くことで答えている。

ここで、興味深く思われるのは、別宮の引いた平岡の論が、ドイツの神学者・哲学者フリードリヒ・シュライアーマハーが翻訳者が採り得るとした二つの翻訳方法のうちの一つと、酷似していることだ。シュライアーマハーは二つの翻訳方法を「例えば、ドイツ語の翻訳者がラテン語の著作を訳す場合に、原典がラテン語で書かれてことがわかるように原典に忠実に訳すのか、それとも、ラテン語で書かれている書物をもともとドイツ語で書かれていたかのように（ドイツ人の読者に）読みやすく訳すかの二通りである」（Robinson, 1997:229）と規定した。後者のドイツ語という翻訳言語を重要視する翻訳方法は、日本語という翻訳言語に焦点を定める平岡の翻訳理論と結果的に同一内容となっている。ただし、シュライアーマハーは前者の原典に忠実に訳す翻訳方法を唱導することでドイツ語の刷新を目指した。また、二葉亭はシュライアーマハーほどの明確な意識をもって日本語を変革していこうとしたわけではないが、ロシア語という西洋の言葉を日本語に訳すことで、新しい思想を盛るにふさわしい新しい日本語を獲得していった。すなわち、二葉亭はツルゲーネフと

いうロシア人作家の作品を逐語訳し、新しい翻訳文体を創り出していったのだ<sup>1</sup>。別宮は、二葉亭の徹底した逐語訳の翻訳方法をこうした歴史的な意味をかえりみることなく揶揄し、シュライアーマハーの否定した(日本語という)翻訳言語を重視した翻訳方法を理想としたのである。

次に続くシンポジウム『翻訳の限界と可能性』では、参加者の殆どが日本翻訳専門学校で教え、自らも小説を書いたり、職業翻訳家であったりした人々が一堂に会し、原作に忠実な翻訳とは何かという点から議論を起こしている。まず、武富紀雄が原作に忠実な翻訳とは、直訳つまり逐語訳であるとし、「原作の文章構造に忠実で、実直に品詞をなぞって訳していく」英語学者たちによる「味もそっけもない」翻訳だと反発する。さらに逐語訳から自由な欧米の翻訳者に比べて、「なぜ、日本人だけが、かなしいほど律儀に原文のいわゆる一句一語一節を拾いながら、カンマやコロンの類いにまで気を使って、まるで大切な玉でも抱いて歩くような、そんな翻訳態度を一般的に要求されるのか」(武富 1973:27)と日本の翻訳者の置かれた状況を嘆いている。中村能三や山下諭一、高橋泰邦らシンポジウム参加者の多くに共通するのは、日本の読者が翻訳文学作品中の文化的相違にも直訳調の生硬な翻訳文体にも寛容なため、翻訳文学を創作にまで高めることができないという苛立ちである。つまり、先ほどのシュライアーマハーの翻訳方法の二分類を借りれば、日本では原典に忠実な翻訳方法があまりに深く浸透し過ぎ、欧米で普通におこなわれている翻訳言語を重視した翻訳方法をとることができない、という苛立ちであるようにも読めるのだ。ただ、出席者の中で唯一ドイツ文学とフランス文学の翻訳家であった大久保和郎は、二葉亭と坪内逍遙の翻訳を比較して、「逍遙のものを読んでみれば、けっきょく逍遙が出てますよ。逍遙の日本語を読んでいるんですね。そして、その上にもう一つ、逍遙の日本語の遊びを読んでいますよ」(大久保 1973:34)と、こなれすぎた翻訳、すなわち行き過ぎた翻訳言語重視の翻訳をした逍遙を批判し、二葉亭の二葉亭色のない翻訳方法を間接的に評価している。

### 3. 「日本語」と「文体」

第2号以降、翻訳をめぐる議論は「日本語」、「文体」という二つのキーワードを軸に展開している。例えば「語学教育と翻訳」と題するシンポジウムでは、まず、当時、小田実らと予備校で英語を教えていた小中陽太郎が「語学教育は翻訳をさせようとするのじゃなくて、何が書いてあるかということがわかる訓練をして、それからどう日本語に直すかという作業をすべきだ」(小中 1973:36)と述べる。そして、参加者全員が、原文と一対一の対応を迫られる英文和訳文という直訳文を書かされる学校教育から、原文を離れて一人歩きできる日本語が書けるような翻訳教育へ移行することを理想とすべきだという点で意見が一致している。つまり、直訳とは学校文法に忠実な英文和訳であり、そこで用いられる日本語は原文の意味が解っているかどうかを判断するための手段として使われているだけだと批判され、最終的には日本語教育が推奨されるのである。

続く鈴木武雄による「和訳と翻訳と——翻訳文体論序説」では、「(英文)和訳というのは意味さえとればよいのにたいして、翻訳というのはそれ以上のことが問題になるのである。それ以上のこと、とは、ただ一つ、“文体”である」として日本語の「文体」に問題を絞り、「翻訳の場合は、日本語で直接に書く場合よりもなお困難なことには、日本語としての文体があるうえに、その文体が原

文の著者の文体とあたらかぎり近似している必要がある」(鈴木 1973:72-73)と翻訳文体論を進めている。さらに、鈴木は「(文体とは)単語と単語、句と句、文章と文章との、作品全体の中における有機的な結びつき方」であるとして、野崎孝のサリンジャー作品の翻訳例などを挙げるなどして、「感性的にしか捉えることができない」文体をなんとか説明しようと試みている。それに対して英文学、ロシア文学の翻訳もし、詩人でもあった小笠原豊樹は「私の翻訳 ちょっとだけ」と題したエッセイで、翻訳は技術であるが、技術というものは当の技術者以外には理解しにくいのが通常だとして、翻訳の技術についての具体的な説明を避け、翻訳を日本語の問題に戻して、次のように述べている。「語学ができなければ翻訳はできませんが、翻訳はほんとうは語学じゃないんです。外国語を日本語に直すという仕事は、少なくとも半分は、いや、七、八割、ひょっとすると大部分が日本語の問題なんです。日本語を上手に使える人は外国語もある程度までは読みこなしますが、外国語を上手に使える人が日本語の文章を上手に書けるかという、必ずしもそうではない」(小笠原 1973:185)として、原文の理解以上に、理解したことを日本語でどのように表現するかが大切だと述べている。小笠原は明らかに日本語という翻訳言語を重視した翻訳態度を理想としている。

ロシア文学者からの発言はこのほかにもいくつか見られ、当時北海道大学の教授でロシア文学を教えていた内村剛介が外山滋比古との間でおこなった対談『一体誰のための翻訳か——翻訳の原点を求めて』で内村は、翻訳は基本的に口述でしていると語り、その理由を読者にとって読みやすい翻訳をするためであるとする。対談相手のお茶の水大学で英文学を講じていた外山は「読者にとって読みやすい翻訳」をさらに敷衍して「日本の翻訳の概念——原文忠実主義の翻訳のほかに、ヨーロッパ流の、原語が読めない人にとにかく理解できる、最後まで読んでもらえることを眼目とする翻訳も認めるべきだ」(外山 1973:13-14)と述べる。第二節で引用したシュライーマハーは翻訳者がとることのできる翻訳方法を「原作者をできる限りそっとしておき、読者を原作者の(を理解させる)方向に動かすか、読者をできる限りそっとしておき、原作者を読者の(理解しやすい)方向に動かすか」(Robinson, 1997:229)の二つであるとも定義していた。外山が「原語が読めない人にとにかく理解できる、最後まで読んでもらえることを眼目とする翻訳」と言う時、「原作者を読者の(理解しやすい)方向に動かす」翻訳を意図していたと考えられる。また、日本で一般的な翻訳の概念である原文忠実主義の翻訳とは「読者を原作者の方向に動かす」読者に負担のかかる翻訳であったという認識がここで明らかに示されている。しかしながら、アメリカの翻訳理論家ヴェヌティはシュライーマハーの唱導した翻訳方法を異化的翻訳として次のように理論化して、英語圏における読者重視の翻訳方法の革新をめざしたのである。

シュライーマハーはほとんどの翻訳者たちは同化的翻訳方法を採用しているとした。つまり〔同化的翻訳方法を採用する翻訳者たちは〕自国文化中心主義の考え方によって、外国語で書かれたテキストを自分たちの国の価値観の中に取り込んでしまい、原作者を本国に送り返してしまうのである。しかし、シュライーマハーは異化的な翻訳方法を優先する。〔異化的翻訳方法を採用する翻訳者たちは〕自国の文化から逸脱しようとして、外国語で書かれたテキストに内在する言語学的、文化的な差異を翻訳テキストの中に刻印し、読者を海外に送

り出すのである。(Venuti, 1998:242)

ヴェヌティが英語圏で主流を占めた同化的翻訳方法を刷新するために異化的翻訳方法をめざしたのに対して、日本の場合は原作に忠実な異化的翻訳方法があまりにも敷衍されすぎたため、日本語の復権をめざして同化的な翻訳方法が推奨されるようになった、という逆の経過を辿っていることが1970年代の初頭に出た『季刊翻訳』の記事から読み取れるのである。『季刊翻訳』誌上での議論は、こうして二葉亭を元祖とする異化的な翻訳方法を否定し、文体をなす自然な日本語で書かれた、読者を重視する同化的な翻訳方法を理想とする方向に向かっていったように思われる。

#### 4. コミッサーロフの『翻訳論序説』

以上『季刊翻訳』誌上での翻訳議論を概観してきたが、第5号から最終号となった7号にかけて、いよいよ本格的な翻訳論が紹介されることになる。それは磯谷孝によるコミッサーロフの『翻訳論序説』で、これは英語からロシア語への翻訳を対象としたものであり、磯谷自身『翻訳論序説』の付記で認めているように「日本語がかかわってくるときには、二葉亭四迷が試みたような逐語的対応はとても望み薄で、レベルとレベルの対応も融通をもたせなくてはならず、語が文に、文が語に置きかえられる場合もありうるはず」(磯谷 1975:134)で、意識が必須となる。ここで磯谷のいうレベルとはコミッサーロフが「ことば」のなかに認めた五つのレベルのことで、上位から「コミュニケーションの目的のレベル、状況描写のレベル、通報(構造)のレベル([訳注]言語学でいう言表のレベルに相当)、言表のレベル([訳注]言語学でいう文のレベルに相当)、言語記号(語)のレベル」(コミッサーロフ、磯谷訳 1974:114)となっている。コミッサーロフはこれら五つのレベルを通して最大限の等価性を確保することが翻訳の理想であるとし、それを等価レベル理論と呼んだ。さらに、翻訳可能性の最大限は最低次のレベル(言語記号のレベル)での等価性であり、その最小限は最高レベル(コミュニケーションの目的のレベル)での等価性であるとし、各レベルごとの等価性を具体例を挙げて分析している。

筆者がとりわけ興味深く感じたのは翻訳可能性が最大限であるとした言語記号レベルでの等価性について、コミッサーロフが挙げている具体例のいくつかである。まず、「指示対象の確認の際における等価性」として挙げられた固有名詞と代名詞との交替についてコミッサーロフは次のような説明を加えている。(誤解のないように念を押しておくが、ここに挙げられた翻訳例は英文のロシア語訳を磯谷が日本語に直訳したものである。)

指示対象は個別的表示(固有名詞)、それが属している部類の表示(普通名詞)あるいは、テキストの別のところですでに挙げられた表示にこの指示対象を関係させること(代名詞)によって指示することができる。翻訳に際しては指示対象の指示は、原文と同じ方法でなされるのがふつうである。たとえば、

Martin stood at the door. [マーチンは戸のそばに立っていた。]

しかし、翻訳言語における言表構成規則により、翻訳に際して等価性を設定するときに指示対象確認の方法を変更することが必要になる場合もある。

His voice was lively..... [マーチンの声はずんで響いた.....] (コミッサーロフ、磯谷訳 1975:116)

記号の連想イメージを伝達する際の等価性において、原語と翻訳言語における対応語が同一の連想イメージを持つ例として挙げられた次の例文とその訳文も見てみよう。

“And pride so moved within her that even her heart felt cold as stone.”

[そして高慢がディニーの内部でむくむくと頭をもたげてきたので、心までがまるで石のように冷たくなった。] (コミッサーロフ、磯谷訳 1975:122)

第一の用例では、コミッサーロフも断っているように、翻訳言語であるロシア語の言表構成規則によって、英文中の三人称代名詞 “his” がロシア語翻訳文中では固有名詞「マーチン」へと、指示対象確認の方法が変更されている。また、第二の用例でも英文中の三人称代名詞 “her” が固有名詞「ディニー」に置き換えられている。例文では二つとも英文中の「三人称代名詞」がロシア語翻訳文中で「固有名詞」へと、指示対象確認の方法の変更がなされているのである。

さて、この小論の主題である 1970 年代のドストエフスキー翻訳、つまり、ロシア文学の日本語訳を考える時、最も興味を惹かれるのは、日本語の三人称代名詞「彼」と「彼女」がどの程度忠実にロシア語の三人称代名詞の訳語として使われているのかという点である。コミッサーロフは英露翻訳を分析の対象として翻訳可能性が最大限であるとした言語記号レベルでの等価性に於いて「指示対象」を示す「(三人称)代名詞」と「固有名詞」の交替を指摘したが、露日翻訳においても「三人称代名詞」が「固有名詞」に交替することはあるのだろうか。あるとすればその割合はどの程度なのか？ さらに考えなくてはならないのは、日本語にはそもそもヨーロッパ言語にみられる三人称代名詞に相当する言葉がなかったことである。柳父章がその著書『翻訳語成立事情』で述べているように、「he は三人称代名詞だが、「彼」はもともと指示代名詞で、幕末から明治の頃まで、人も物も指す代名詞であった」(柳父 1982:199)のである。柳父は続けて「三人称代名詞の翻訳語として(「彼」「彼女」が)使われるようになって以降、意味が変わってきた」と述べて、日本近代小説中の「彼」「彼女」の意味の変化を追っている。が、ここで重要なのは「日本語にはなかった三人称代名詞「彼」「彼女」が翻訳語として使われるようになった」とは、つまり、三人称代名詞「彼」「彼女」が原文の言語的差異を明確に訳し出す異化的な翻訳方法で生み出されたという点である。この小論ではまた、異化的な翻訳方法で生まれた「彼」「彼女」が、当の翻訳文中で意味的にまた、用法的にどのように変化してきたのかを追っていきたい。先ほどの「露日翻訳においても「三人称代名詞」が「固有名詞」に交替する事はあるのだろうか」という問いは、三人称代名詞「彼」「彼女」が翻訳語として定着したという前提のもとで成り立つものである。定着したとすれば、その後、日本語文という規範との拮抗の中で意味的、用法的にどのような変化を遂げたのかという問いに発展

するだろう。そしてまた、翻訳語として誕生した「彼」「彼女」をロシア語原文の三人称代名詞“он [he]”, “она [she]” とどの程度対応させるかに、翻訳者の翻訳態度、つまり、同化的翻訳方法を採用するのか、それとも異化的な翻訳方法を採用のかという選択がはっきりと示されるものとする。

## 5. ドストエフスキー作品の翻訳小史

ドストエフスキー作品が本格的にロシア語原文から直接日本語に翻訳され始めたのは1914(大正3)年のことである。それまでロシア語からの直接訳としては、ロシア正教神学校長の瀬沼恪三郎による翻訳に尾崎紅葉が文章に手を入れて1902(明治35)年に『胸算用』と題して発表した短編が一つ(原作は『クリスマス・ツリーと婚礼』)と、恪三郎の妻で紅葉の弟子であった瀬沼夏葉による『貧しき人々』の部分訳『貧しき少女』が1904(明治37)年に出ているだけであった。それが、1914(大正3)年になると昇曙夢による『虐げられし人々』が出たのをかわきりに、中村白葉が『罪と罰』を、米川正夫が『白痴』をと、ドストエフスキーの長編小説が次々と原文から直接翻訳、出版されていった。米川はまた三年後の1917(大正6)年にはドストエフスキーの絶筆となった一大長編『カラマーゾフの兄弟』を翻訳出版している。榊原貴教が『翻訳と歴史』第11号、12号に載せた『ドストエフスキー翻訳作品年表』<sup>2</sup>によると、米川の『カラマーゾフの兄弟』は全11巻16冊で新潮社から出版されはじめた『ドストエフスキー全集』の最初の巻に収録されていた。この日本で初めてのドストエフスキー全集には、曙夢の『虐げられし人々』、中村の『罪と罰』、米川の『白痴』と『悪霊』が収められ、すべての翻訳が原文からの直接訳であったことが特筆される。

大正時代15年間には、原文からの直接訳、英語からの重訳を含めて実に四つの全集が出ている。これに対して、昭和に入ってからドストエフスキー全集は1934(昭和9)年に三笠書房から出たのが初めてで、『虐げられし人々』は熊沢復六に、『罪と罰』は米川、『白痴』と『カラマーゾフの兄弟』は中山省三郎にと、翻訳者が一新され、中村による『罪と罰』が米川の翻訳に変わることが目を奪う。その後、1941(昭和16)年には、河出書房から米川正夫の個人全集である『ドストエフスキー全集』の刊行が始まった。しかし、この個人全集は戦時中の紙不足もあって刊行が中断された。米川の個人全集は1969(昭和44)年に愛蔵決定版『ドストエフスキー全集』と銘打って河出書房新社から再び刊行が始まり、1971(昭和46)年に完成している。

さて、1970年に入ると『決定版ドストエフスキー全集』が1978(昭和53)年に新潮社から刊行開始となり、二年後に刊行が終わっている。その中に収められた作品の翻訳者を見ると『虐げられた人びと』が小笠原豊樹に、『罪と罰』の翻訳は工藤精一郎、『白痴』は木村浩、そして『カラマーゾフの兄弟』は原卓也となっている。米川が『罪と罰』を訳したことで、ドストエフスキーの翻訳者名簿からその名前が早々と消え去った中村白葉はもとより、ドストエフスキー全集を完成させた米川正夫の名前さえ消えて、翻訳者が再び一新されているのが注目される。『決定版ドストエフスキー全集』の刊行以来日本では新しくドストエフスキー全集が出されておらず、現在この全集も絶版中ということである。2006(平成18)年に亀山郁夫の『カラマーゾフの兄弟』が光文社文庫から出て大ベストセラーになり、ドストエフスキーブームの再燃となるまで、日本では暫くドストエフスキーの名前すら知らない大学生が現われるほどの沈滞期が続いた。

## 6. 1970年代のドストエフスキー翻訳

ここでいよいよ 1970 年代のドストエフスキー翻訳作品の分析に入るわけだが、取りあげた翻訳作品について少し解説を加えておきたい。まず、分析の対象としたドストエフスキーの作品は大正期に日本で初めて原文からの直接訳で翻訳紹介された『虐げられし人々』『罪と罰』『白痴』、そして『カラマーゾフの兄弟』の四作品とした。また、選んだ翻訳者は、『虐げられた人びと』の小笠原豊樹、『罪と罰』の江川卓、『白痴』の木村浩、『カラマーゾフの兄弟』の原卓也である。この四つの翻訳作品は 2015 年の現在にいたるまで文庫本での出版が続いている。また、江川の『罪と罰』を除けば、すべての作品が 1978 (昭和 53) 年の『決定版ドストエフスキー全集』に収められており、1970 年代のドストエフスキー翻訳作品として時代を彩った作品であると考えられる。なお、四つの作品の初出については、江川の『罪と罰』が旺文社文庫として 1966—1967 に出ており、小笠原の『虐げられた人びと』、木村の『白痴』、原の『カラマーゾフの兄弟』はみな新潮世界文学の中に収録され、それぞれ 1968 年、1969 年、1971 年に出版されている。1978 年の『決定版ドストエフスキー全集』に収められている工藤精一郎の『罪と罰』については、今でも新潮文庫として出版が続いてはいるが、初出が 1961 年と江川のものより古いので採らなかった。翻訳文体の分析方法としては、1970 年代を飾る四つの翻訳作品を、大正時代に曙夢、中村、米川によってなされた日本で初めてのロシア語からの直接訳と文体を比較することでおこなっていききたい。ドストエフスキーは一文が長いことが大きな文体的特徴であるので、原文のピリオドと訳文中の句点の数とを比較したり、作品に応じて原文動詞の時制の訳出法、原文中と訳文中の段落の長さの比較などをし、最終的に三人称代名詞「彼」「彼女」の使用数と使用箇所を原文のそれと比較することにより、1970 年代の翻訳作品としてあげた四つの作品の翻訳の手法を探っていきたい。まずロシア文学の翻訳に一時代を築いた中村の『罪と罰』、米川の『白痴』と『カラマーゾフの兄弟』をとりあげ、最後に曙夢の『虐げられし人々』が 1970 年代の新訳でどのように文体を変えていったのかを見ていくことにしよう。

### 6.1 江川卓の『罪と罰』

『罪と罰』は 1892 (明治 25) 年に内田魯庵によって英文からの重訳で日本で初めて翻訳紹介されたドストエフスキー作品である。江川は『罪と罰』の冒頭を次のように訳し出した。江川の冒頭の訳文を中村のものと比較してみよう。

(江川卓訳、1966 年初訳)

七月はじめ、めっぽう暑いさかりのある日暮どき、ひとりの青年が、S 横丁にまた借りしている狭く暑い小部屋からおもてに出て、のろくさと、どこかためらいがちに、K 橋のほうへ歩きだした。

青年はうまいこと階段で下宿の主婦おかみと出くわさずにすんだ。彼の小部屋は、五階建ての高い建物をのぼりつめた屋根裏にあり、部屋というより戸棚という感じだった。おまけに階



段ひとつ下が、まかないと女中つきでここを[彼]に貸している主婦の住居なので、[青年]は外出のたび、たいい階段のほうに向けてあけはなしになっている主婦の台所のわきを、いやでも通らなければならなかった。[青年]は毎度、そこを通るたびに、一種病的な気おくれにとらわれ、それがわれながら恥ずかしく、顔をしかめた。主婦にたいそうな借りがあるので、顔をあわすのがこわかったのである。(ドストエフスキー2007:11)

(中村白葉訳、1914年初訳)

七月初旬の怖しく暑い時分の事、ある夕方近く、[一人の若い男]が、C—横丁の借家人から又借りしてみた自分の小部屋を通りへ出て、心の極<sup>きま</sup>らないさまで、のろのろとK—橋の方へ歩いて行つた。

[彼]は都合よく、階段で主婦と出<sup>で</sup>會<sup>く</sup>はすのを免れた。[彼]の部屋は高い五階家の屋根裏にあつて住居といふよりは、寧ろ戸棚の方に似てゐた。[彼]が女中と賄<sup>ま</sup>附<sup>ま</sup>きで此部屋を借りてゐた下宿の主婦は、[彼]の一階下の別室に住んでゐたので、通りへ出る時には、[彼]はきつと、階段に向つて大抵いつも一杯に明放されてゐる主婦の臺所の傍を通り過ぎねばならなかった。そしてその度毎に、[若い男]は、そこを通り過ぎながら、一種の病的な、臆病な気分を感じた、[彼]はその気分を恥ぢた、そしてその爲めに顔を顰めた。[彼]は主婦に大分借があつたので[彼女]と顔をあはすのを怖れたのであつた。(ドストエフスキー 1918:3)

『罪と罰』については、ドストエフスキーは初め一人称で書こうとしたが、思い返して三人称小説にしたという興味深い経緯がある。そうして成った三人称小説の冒頭で「語り手」は、主人公のラスコーニコフを、“молодой человек [a young man/ 若い男]”、あるいは “он [he]” としか呼ばない。主人公の名前の宙吊り状態は第一部の一で、後に斧で惨殺することになる金貸しの老婆を訪問した際、主人公がラスコーニコフという自分の名前を告げるまで続く。上述した冒頭文のロシア語原文でもドストエフスキーは、主人公を “один молодой человек [a young man/ 一人の若い男]” として登場させたあと、三人称代名詞 “он [he]” を六度、“молодой человек [the young man/若い男]” を再度使って主人公を指し示すことで、『罪と罰』の探偵小説的な要素を強調している。三人称女性代名詞 “она [she]” については、「下宿の主婦<sup>おかみ</sup>」を指し示すために一度だけ使われている。

ドストエフスキーの原文に忠実であろうとした中村は三人称代名詞「彼」を原文より一つ多い七回使用し、「彼女」についても一回原文通り再現している。中村が一度だけ原文にはない三人称代名詞を書き加えた部分は「[彼]はその気分を恥ぢた」という一文で、主語を明確にするためであったと思われる。中村はまた、ドストエフスキーの原文の句読点にもかなり忠実で、句点については原文の六つのピリオドに、位置も回数もびたりと符合させている。さらに、原文の過去形動詞の再現にも神経を行き渡らせ、冒頭の六つの文をすべて「た」形で結んでいる。文末ばかりか文中にまで「臆病な気分を感じた、[彼]はその気分を恥ぢた、」と「た」形を頻用しているのには、徹底的な逐語訳をしようとした中村の氣迫のようなものが感じられる。中村は 1934(昭和 9)年「翻譯文の表現

と指導」と題した小論で、「文芸作品の翻訳にあたっては、作の内容——何を伝えるかの問題よりも、作の形式——如何に伝えるかの方が大切である」として「原則として直訳——逐字訳を主張する」（中村 1934:302,304）と明言している。中村はこうして原文のピリオドを句点で、ロシア語動詞の過去時制を「た」形で、そしてもともと日本語にはなかった三人称代名詞を「彼」「彼女」によって忠実に再現し、『罪と罰』という小説に必須であった三人称客観小説の形を整えていったのである。つまり、中村は徹底的に異化的な翻訳方法を採用したといえよう。

一方、江川はドストエフスキーの原文のピリオドと動詞の過去時制は、句点と「た」形によってほぼ正確に再現している。また、四番目の文も「おまけに階段ひとつ下が、まかないと女中つきでここを[彼]に貸している主婦<sup>おかみ</sup>の住居なので、[青年]は外出のたび、たいてい階段のほうに向けてあけはなしになっている主婦の台所のわきを、いやでも通らなければならなかった」と、原文通りの長文として訳し出しているが、原文とは語順がかなり入れ替わっている。原文を文字通り直訳すれば「[彼]の下宿の大家、つまり[彼]が女中と食事つきでこの小部屋を借りていた女性は、一階下に住んでいたので、通りへ出るたびに、[彼]は階段に向かってたいてい、いつも一杯に開け放されている大家の台所のそばを通り過ぎなければならなかった」となり、語順の転倒以上に重要なのは三人称代名詞の使用回数の差であることがわかる。直訳すると、「彼」という三人称代名詞だけが文中に三度も現われてしまうという不自然さを、江川は最初の二つの「彼」のうちの一つを省略し、三度目に使われる「彼」を“молодой человек [the young man/若い男]”の訳語である「青年」に置き換えることで和らげているのだ。江川はさらに、引用箇所の中中で最初に使われる三人称代名詞を、「彼」ではなく「青年」に置き換え、最後の文についても「主婦にたいそうな借りがあるので、顔をあわすのがこわかったのである」と、原文にある三人称代名詞を男性形も女性形もまったく再現せずに訳している。結局、冒頭文で中村が男性形、女性形あわせて全部で八度、原文より一度多く三人称代名詞を使ったのに対して、江川は三人称代名詞を男性形で二度使っているだけなのである。

三人称代名詞の使い方を第一部第一章全体について調べてみると、原文に忠実な逐語訳を心がけた中村は主人公ラスコーニコフを指し示すために使われた「彼」を原文の 86 回とほぼ同数の 84 回使っている。それに対して、江川は 45 回と「彼」の使用回数をほとんど半減させている。ドストエフスキーが主人公を指し示す言葉として 15 回使った“молодой человек [the young man/若い男]”については、中村が「若い男」と訳して原文通り 15 回使っているのに対して、江川は「青年」という訳語で原文より六つ多く 21 回使っている。これは、江川が原文の三人称代名詞を「彼」ではなく「青年」に代替させている例が六つあることで説明がつく。結局、江川は中村が原文に忠実に再現した三人称代名詞を六度普通名詞の「青年」と置き換え、残る 35 の三人称代名詞は訳し出さなかったことが知れるのである。つまり、中村が異化的な翻訳方法を採用して、翻訳語「彼」を多用してロシア語原文の三人称代名詞を逐一訳し出して行ったのに対し、江川は同化的な翻訳方法を採用して、日本語には本来なかった三人称代名詞「彼」の数を訳文の中から減らしていったのである。

## 6.2 木村浩の『白痴』

ここでは、スイスでの療養を終えてロシアに戻った『白痴』の主人公ムイシュキン公爵が最初に訪れるエパンチン将軍の人物描写を、木村と米川の訳文で読み比べてみよう。

(木村浩訳 1969年初訳)

エパンチン将軍は、リテイナヤ街からすこしスパス・プレオラジエニヤ変容救世主寺院寄りの、自分の持家に暮らしていた。この、六分の五は他人に貸してある(豪壮な)邸宅のほかに、エパンチン将軍は、サドーヴァヤ街にも大きな邸宅を持っており、それもまたたいへんな収入源となっていた。これら二つの邸宅のほかに、ペテルブルグ近在に、きわめて収入の多いすばらしい領地があったし、なおそのうえペテルブルグ郡には何かの工場を持っていた。その昔エパンチン将軍は、これはもう周知のことであるが、独占企業に関係したことがあった。現在はいくつかのしっかりした株式会社に関係して、きわめて大きな発言権を持っていた。噂によれば、彼はたくさんの金と、たくさんの仕事と、たくさんの友人知人を持っているということであった。その所によっては、もちろん、その勤め先もこれに含まれるわけだが、ぜひともいなくてはならぬ人物になることができた。(ドストエフスキー1970:30)

(米川正夫訳 1914年初訳)

エパンチン将軍はリチエイナヤ街から少し『変容救世主寺院』の方に片寄つた處にある、自分の持家に住んであた。此の立派な家の外ほかに(此の家の六分の五は他人に貸付てある)、エパンチン将軍はサドーヴァヤ街にも大きな家を持つてゐて、これが矢張り非常な収入になる。此の二件の家の外ほかに、ペテルブルグの直ぐ傍いたに、至つて収入の多い大きな領地があるし、又ペテルブルグ郡には何とかいふ工場もある。昔エパンチン将軍は土地貸附の組合に関係してゐたが、今は幾つかの基礎の鞏固な株式會社に関係して、中々大した名聲である。澤山金のある人、澤山仕事のある人、澤山交際のある人として彼は通つて居た。場合によつては——務め向の方も無論さうだが——何うしても無くてかなはぬ人、と云はれる丈けの働きがあった。(ダスタエフスキ 1914:33)

『白痴』も『罪と罰』同様、三人称客観小説として書かれている。語り手が時に饒舌をふるいだすことがあっても、基本的に動詞は過去形が採用され、三人称代名詞も頻用される。日本語訳についてまず引用文中の三人称代名詞をみると、木村も米川も三人称男性代名詞「彼」を、エパンチン将軍を指し示すため一度使っただけである。それに対して、引用部に相当する原文には三人称代名詞が男性形で四度、エパンチン将軍を指し示すために使われている。木村も米川も三人称代名詞を、中村が『罪と罰』で行ったほど原文に忠実に再現していないのである。

1912(大正元)年に東京外国語学校を同時に卒業した米川と中村は、1914年にドストエフスキーの作品を翻訳することで、翻訳者としての道を共に歩みはじめた。だが、二人の翻訳態度は対照的といつてよいほど異なっていた。米川は『白痴』が出版されたとき、訳文が流暢すぎると批判さ

れたことを受けて、「ロシアの小説の邦訳は、文字の仲介という点からいえば、ロシア人が原文を読むのと同じ容易さをもって、日本人にも読まれるべき」(米川 1962:46)だとして、日本語の文としての読みやすさを翻訳上の主眼とした。つまり、同化的な翻訳態度を主張したのだ。その米川が訳文の中で、もともと日本語にはなかった三人称代名詞の「彼」を制限したのは、当然であった。米川はまた、日本語の文として自然であるようにと、文末詞「た」の中に「る」を意識的にさしはさんだ。引用文に相当するロシア語原文を調べると、動詞はすべて過去形である。が、米川は六つある文末詞のうち三つまでを「る」形にして訳し出した。米川はドストエフスキーが動詞の過去形を使って登場人物を紹介したりその容貌を描写したりした箇所や、登場人物たちの日常生活を記述した箇所を、「た」形に「る」形を適宜さしはさんだ「自然な日本語」で訳し出していったのである。米川の『白痴』第四章までの「た」形が文末詞全体に占める割合は 70 パーセント前後で、藤村や花袋らの自然主義文学作家の文体に似ていた。

一方、木村は引用箇所でも原文の動詞の過去時制に忠実に六つある文末詞のすべてを「た」形を使って訳し出している。1969 年に初訳が出た木村の『白痴』における明白な文体的特徴は、文末詞に「た」形が頻繁に繰り返されることである。木村は原文の動詞の過去形に忠実ではなかった米川の訳文を修正したのだ。が、三人称代名詞に関しては、木村は米川と同じように使用回数を制限している。第一章で、ドストエフスキーが 35 回、人物を指すために人称代名詞 “он [he]” を使っているのに対し、米川は 21 回、木村にいたっては 11 回しか「彼」を使わなかった。しかし、第二章以降は米川と木村の三人称代名詞の使用回数には大差はみられず、二人ともドストエフスキーの三人称代名詞の使用回数をほぼ半減させている。木村と米川の訳文は、句読点についても似ており、二人ともドストエフスキーがコロンやセミ・コロンを用いて書いた長文をぶつぶつと切って、読みやすくしている。こうしてみると、過去形動詞の訳語として文末詞「た」が木村の訳文で定着しているのを除けば、1914 年の米川の訳文と 1969 年の木村の訳文には、大きな文体的差はないことがわかる。三人称代名詞を制限したりして同化的翻訳方法を採用した米川の手法を、木村も基本的には踏襲しているのである。

### 6.3 原卓也の『カラマーゾフの兄弟』

ドストエフスキーの文は長い、段落もまた長大である。作家の息の長さがはっきりと窺い知れるところである。ところで、米川はドストエフスキーの長い文を細かく切るだけでなく、段落もまたかなり細かく切っている。次に引くのは第二章の冒頭で、原が「遠ざけられた長男」と直訳した章題を、米川は「厄介払い」と思い切って意識している点が注目される。

(原卓也訳、1971 年初訳)

もちろん、こういう人間がどんな養育者であり、父親であったかは、想像できるだろう。父親たる<sup>彼</sup>には、まさに当然起るべきことが起った。つまり、アデライーダとの間にもうけたわが子を、まるきり放ったらかしにしたのである。それも、<sup>子供</sup>への憎しみからでもなければ、恥をかかされた夫としての何らかの感情からでもなく、ただ<sup>子供</sup>のことなどすっかり忘れて

いたからにすぎなかった。彼が涙や哀訴でみなにつきまとい、わが家を背徳の園と化していた間、三歳になる男の子ドミートリイの世話を引き受けたのは、この家の忠僕グリゴリーであった。もしこのとき彼が面倒をみていなかったら、子供のシャツを取りかえてやる者もいなかったにちがいない。おまけに、子供の母方の親類まで最初のうち、この子のことを忘れても同然の事態になっていた。子供の祖父、つまり、アデライーダの父親である当のミウソフ氏は、すでにこの世になかったし、未亡人になった祖母はモスクワに移ったあと、すっかり身体をこわしており、姉妹たちはみな結婚してしまったので、ほとんどまる一年というもの、ドミートリイは召使のグリゴリーの手もとにおかれ、召使小屋で暮す羽目になった。もともと、かりに父親がこの子のことを思いだしたとしても(実際のところ、わが子の存在を知らぬはずはなかったのだから)、どのみち乱行の邪魔になるばかりだったから、みずからまた召使小屋へ追い払ってしまうにちがいなかった。(ドストエフスキー1978:21-22)

(米川正夫訳、1914年初訳)

勿論こんな男が父として養育者として何んな風であつたか、といふ事は容易く想像出来よう。父としての彼は、當然彼がしさうな事をした迄である。つまりアデライーダとの間に儲けた自分の子を全然放擲して了つたのである。併しそれは子供に對する憎惡の爲めでもなければ、侮辱された良人としての感情から出た事でもない。只子供の事をすっかり忘れて了つたからに過ぎない。彼が涙と訴へとで皆の者にうるさく附纏つたり、自分の家を淫蕩の洞穴にしたりしてゐる間に、三つになるミーチャの世話を引受けたのは、此家の忠僕グリゴリーであつた。若し當時此男が子供の事を心配しなかつたら、肌着を變へてやる者さへ無かつたかも知れない。其上子供の母方の實家でも、始の中彼の事を忘れた様な具合になつて了つた。祖父ミウソフ氏、即ちアデライーダの父は當時もう此世に居なかつたし、其未亡人、つまりミーチャの祖母は莫斯科へ越して行つて、重い病氣に掛つたし、姉妹はみんな嫁入りして了つたので、ミーチャは丸一年グリゴリーの手許にあつて、下男部屋に起居せねばならぬ事となつた。若し父親が彼の事を想ひ出したとしても(又實際ゾーデルも此子の存在を知らない譯に行かない)自分から又元の下男部屋へ追いやつて了つたに相違ない。何故と云つて子供は自分の放蕩の邪魔になるからであつた。(ドストエフスキー1917:8-9)

ドストエフスキーは引用箇所、六つのピリオドを使った。日本語の訳文については、原が9回、米川は11回句点を使っている。つまり、米川は一文の長さをドストエフスキーの文の半分の長さにしたのである。原の一文の長さはその中間である。調査を第一章から五章まで拡大してみると、原の使った句点の数はドストエフスキーのピリオドとコロン、セミ・コロンの総数とほとんど一致している。原はドストエフスキーの息の長い文をかなり忠実に再現しているのだ。また、原の段落の数はドストエフスキーのそれと完全に一致している。一方、米川の訳文中の段落数はドストエフスキーの原文の段落数の二倍から三倍になっている。

米川のこうした原文から自由な句点の使い方や段落の分け方について、原は「翻訳者によっては、原作者の思想、作品のテーマなどを理解してもらうためには、まず日本語として抵抗なく読める文章にしなければいけないと考えて、たとえばドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』のように、七～八行もコマでつないでゆく息の長い文章でも、簡潔に区切って訳す人もあります。たしかに訳文は歯切れがよく、とても読みやすいのですが、ロシア語の原書とくらべてみると、やはり、この訳文だとドストエフスキーの体臭といったものが伝わらないのではないだろうかとも思います」(原2000:148)と述べて、批判している。

では、原の『カラマーゾフの兄弟』が徹底した逐語訳、すなわち異化的な翻訳であったのかというと、そうでもなく、三人称代名詞に関しては米川の採った同化的翻訳方法を踏襲している。引用文中の三人称代名詞をみると、原は「彼」を三回だけ兄弟たちの父フョードル・カラマーゾフを指し示すために使っている。米川も「彼」を同じく三回父親を指し示すために、あとの二回を長男のドミートリイ・カラマーゾフを指し示すために使った。それに対してロシア語原文では“он [he]”が父親を指すために六回、長男を指すために八回、長男の祖父ミウソフを指すために一回、さらに召使のグリゴリーを指すのに二回と、全部で17回も使われている。原も米川もその多くを訳し出さなかったのだが、原の場合、原文で長男を指すために使われた三人称代名詞に「子供」「この子」「わが子」という普通名詞を代替させた例が四箇所ある。米川もやはり、「子供」「此子」を四回、長男のドミートリイ(米川はミーチャと愛称を使っている)を指す三人称代名詞に置き換えた。また、召使(米川は「忠僕」と訳している)のグリゴリーを指す三人称代名詞を「此男」と、父親フョードルを指す三人称代名詞を「フョードル」「自分」で置き換えた例もある。こうしてみると、三人称代名詞を単に訳し出さないという方法だけではなく、普通名詞や固有名詞で原文の三人称代名詞を置き換えていった例がかなりあることが知れるのである。

第一章から五章までの三人称代名詞の数を、ドストエフスキーの原文と原、米川の日本語訳文中で調べてみると、米川は原文の三人称代名詞の総数の約半数しか訳出していないことがわかる。原の三人称代名詞の再現率はさらに低く、第二章にいたっては30パーセントにまで落ちている。が、平均して40パーセント前後といった再現率である。結局、原の訳文は、原文の句点や段落の数に忠実で、ここでは詳述しなかったが、過去形動詞の「た」形による再現率についても高く、一見異化的な翻訳をしていったかのように見えるが、三人称代名詞の再現率については、同化的な翻訳方法を採った米川よりもさらに低かったのである。どうやら、1970年代のドストエフスキーの翻訳文の最大の特徴は、三人称代名詞の再現率の低さにあるようだ。

#### 6.4 小笠原豊樹の『虐げられた人びと』

『虐げられし人々』という表題で訳し継がれてきたドストエフスキーの自伝的小説を『虐げられた人びと』と口語の表題に変えた小笠原は、文体的にも大きな改変を加えた。次に挙げるのはドストエフスキー自身とされる「語り手」ワーニャの幼馴染のナターシャが恋人のために家出をする場面で、その恋人の父親こそがナターシャの父親を財政的、精神的に苦しめている張本人であるという、ドストエフスキー特有の複雑で緊密につながった人物設定のもとに物語は展開する。

(小笠原豊樹訳、1968年初訳)

「ワーニヤ、あなた私を非難する？」と、やがてナターシャが言った。

「いや、しかし……しかし信じられない。そんなことがあるはずはない！……と、何を言っているのやら自分でも分らずに、私は答えた。

「ところが、ワーニヤ、そうなのよ！ 私は出て来てしまったのよ。父と母がこれからどうなるか、分らないわ……自分がどうなるかも分らない！」

「彼のところへ行くんだね、ナターシャ？ そうなんだね？」

「ええ」とナターシャは答えた。

「しかし、そりゃいけない！」と私は無我夢中で叫んだ。「分るだろう、そりゃいけないんだよ、ナターシャ！ 気違い沙汰じゃないか。お父さんたちを殺し、自分の身も滅ぼすことじゃないか！ それが分ってるの、ナターシャ？」

「分ってるわ、でもどうしたらいいの、私にはどうしようもないのよ」とナターシャは言ったが、その言葉にはまるで刑場へ引かれて行くような絶望感がこめられていた。(ドストエフスキー 1973:67-68)

(昇曙夢訳、1914年初訳)

『ワーニヤさん、あなたは私が悪いとお思ひなの？』と遂々彼女かのぢよは口を開いた。

『否、然し……然し私には信じられません。こんなことは有り得べからざることです！……』と、私は自分が何を言ふかさへ夢中で斯う答へた。

『否、ワーニヤさん、これは實際なのよ！ 私はもう兩親から離れて了つたのです。そして、あの人達が何うなるか私には解りません……いや、私自身が何うなるかさへ私には解りませんの！』

『あなたは彼の所へお出でなのですか、ナターシャさん？ え？』

『え、然うなの』と彼女は答へた。

『だが、それは出来ません！』と私はどきどきしながら叫んだ。『それは出来ないことだといふことはお解りですか、ナターシャさん、不仕合なナターシャさん！ それは愚かなことではありませんか。あなたは御兩親を殺すばかりでなく、自分をも亡ぼして了ふではありませんか！ それを御存知ですか、ナターシャさん？』

『存じてゐます。ですけど私には何う仕様もないの。私の意志ぢやないんですもの』と、彼女は言った。そして彼女の言葉には恰かも死刑にでも引かれて行くやうな絶望が響いてゐた。(ドストエフスキー 1914:88-89)

引用部分で小笠原は三人称代名詞を一箇所しか使っていない。語り手のワーニヤの台詞の中で「彼」と傍点を振って訳し出されたた三人称男性代名詞がそれである。対する曙夢の訳文では、

まず三人称代名詞が地の文において女性形で四度使用されている。これは女主人公のナターシャを指し示すために使われた。男性形は一度だけ、小笠原の訳文と同じ箇所ですべて「彼」と傍点を振らずに使われている。一方、原文を見ると、ドストエフスキーは三人称代名詞の女性形を五度、地の文でナターシャを指し示すために使った。三人称男性代名詞はワーニャの台詞の中で “к нему [to him]” と、イタリック体で強調されて使われている。小笠原はドストエフスキーがイタリック体で強調した三人称代名詞を「彼」と傍点を付すことで忠実に訳したのである。曙夢はイタリック体で強調されている三人称男性代名詞を特別扱いせず「彼」と訳し、三人称代名詞の女性形も「彼女」と原文にほぼ忠実に四回訳し出した。

ところで、小笠原は、曙夢が「彼女」と訳したナターシャを指す三人称女性代名詞を三つ「ナターシャ」として訳し出している。ドストエフスキーが使った三人称女性代名詞を「ナターシャ」という固有名詞で置き換えたのである。こうした地の文では三人称代名詞を固有名詞で置き換えるという方法を、小笠原は『虐げられた人びと』という小説の冒頭から採用した。その結果、「彼」が初めて使われるのは第三章においてであり、そこでもドストエフスキーが登場人物すべてに三人称代名詞を使ったのに対し、小笠原はもっぱらナターシャの父で「虐げられた」老人、イフメーネフを指すためだけに、「彼」を用いた。第四章で「彼」を数度ナターシャの恋人の父親で「虐げられた」であるワルコフスキー公爵を指すために使ったあとは、小笠原はできるかぎり「彼」の使用を制限した。そして、そのあと「彼」が使われるのが、たった今引用文中で挙げたワーニャの台詞の中の傍点付きの「彼」なのである。この「彼のところへ行くんだね、ナターシャ？ そうなんだね？」の「彼」は、「かなり三人称的だが、he や she ほどの三人称代名詞ではない。またコ・ソ・ア代名詞の遠称とも違って、きわめて限られた特定の人を指し、代名詞的であるが、また、名詞的である。しかも、プラスの価値を持ったある存在を示している。」(柳父 1982:212)つまり、恋人やボーイ・フレンドを指すために使われているのである。一方、曙夢の『あなたは彼かれの所ところへお出でなのですか、ナターシャさん？ え？』における「彼」は翻訳語にとどまっている。なお、このあと曙夢は会話中の翻訳語「彼」に不自然さを感じたものかナターシャの家出を思いとどまらせようとするワーニャに『あなたはそんなに彼かれを愛してみたのですか？』と語らせている。「彼」に「あれ」という振り仮名をふって、遠称の代名詞へと意味を後退させてしまったのだ。一方の小笠原は「そんなに彼を愛しているの？」と訳し、「彼」を会話の中で一貫して恋人の意味で使っていった。

## 7. おわりに

1970年代に読まれたドストエフスキー作品の翻訳として四つの作品の文体を見てきたが、これらすべての翻訳文体に共通するのは三人称代名詞の再現率の減少であった。「直訳－逐語訳」で異化的な翻訳をめざした中村の『罪と罰』が原文の三人称代名詞をほぼ百パーセント再現していたのに対して、江川の『罪と罰』ではその再現率がほとんど半減していた。木村は、日本の読者に読みやすい同化的翻訳を目指した米川が『白痴』の訳文で三人称代名詞の使用を半減させていたのを踏襲した。原は読みやすい米川の『カラマーゾフの兄弟』を批判し、原文の句読点や段落を原文に忠実に訳し出すことでドストエフスキーの文体の再現を試みた。が、三人称代名詞に



関しては米川以上に使用頻度を低く抑えていった。そして、小笠原は『虐げられた人びと』で、翻訳語の三人称代名詞「彼」「彼女」の使用を制限するのではなく、地の文から排除しようとした。つまり、地の文における三人称代名詞を固有名詞や普通名詞に置き換え、会話中で使われる三人称代名詞を恋人の意味で使っていったのである。『季刊翻訳』で「外国語を日本語に直すという仕事は、少なくとも半分は、いや、七、八割、ひょっとすると大部分が日本語の問題なんです」と語り、原文の理解以上に原文をいかに日本語で表現するかを重視した小笠原は、異化的翻訳で生まれた翻訳語の三人称代名詞をできるかぎり排除し、日本語として市民権を得た恋人を意味する「彼」「彼女」を訳文の中で使うことで同化的翻訳を実践したのである。小笠原はこうした同化的翻訳の試みをソルジェニーツィンの『ガン病棟』(1969年)やチャーホフの『かわいい女・犬を連れての奥さん』(1970年)等で続け、『ガン病棟』では地の文から三人称代名詞を完全に排除し、会話の中でだけ「彼」「彼女」を恋人の意味で使うという文体の大変革を成し遂げている。

---

※ 論文執筆中に、小笠原豊樹氏が昨年の12月に逝去されていたことを知った。翻訳家としての小笠原氏の功績を讃え、謹んでここに哀悼の意を表したい。

#### 【謝辞】

まず、ロンドン大学の佐藤＝ロスベアグ・ナナ氏に対し、1970年代の翻訳研究を企画し、その編集に大変な労力を払われましたことに深い感謝の意を表します。共同研究者の内山明子氏と佐藤美希氏との研究上のやりとりからは学ぶところがたいへん多く、本研究に参加させていただいたことを心から感謝申し上げます。

#### 【著者紹介】

コックリル浩子 (COCKERILL Hiroko) クィーンズランド大学名誉研究員。専門は翻訳研究。著書に *Style and Narrative in Translations: The Contribution of Futabatei Shimei* (2006, St. Jerome), 『二葉亭四迷のロシア語翻訳——逐語訳の内実と文末詞の創出』(2015, 法政大学出版局)がある。

連絡先: [h.cockerill@uq.edu.au](mailto:h.cockerill@uq.edu.au) [hiroko.cockerill@gmail.com](mailto:hiroko.cockerill@gmail.com)

#### 【註】

- 1 これについてはコックリル浩子著『二葉亭のロシア語翻訳——逐語訳の内実と文末詞の創出』(2015, 法政大学出版局)第一章『「あひびき」初訳と改訳』を参照されたい。
- 2 榊原貴教(2003)「ドストエフスキー翻訳作品年表 1」、『翻訳と歴史』第17号:12-26, 「ドストエフスキー翻訳作品年表 2」、『翻訳と歴史』第18号:6-20 参照。なお、「ドストエフスキー翻訳作品年表 2」について榊原は、佐藤徹夫編『日本に於けるドストエフスキー書誌 著者索引編』を参考したこと、また、「佐藤氏から手紙をいただき、データの提供を受けた」と断つてもある。

【引用文献】

- Robinson, D. (1997) "Friedrich Schleiermacher" in *Western Translation Theory from Herodotus to Nietzsche*, Manchester UK: St. Jerome, pp. 225-238.
- Venuti, R. (1998) "Strategy of Translation" in Mona Baker (ed.) *Routledge Encyclopaedia of Translation Studies*, London & New York: Routledge, pp.240-244.
- 磯谷孝(1974)「V・N・コミッサール著『翻訳論序説』」『季刊翻訳』第5号:108-119. 日本翻訳研究会、みき書房
- 磯谷孝(1975)「V・N・コミッサール著『翻訳論序説』」『季刊翻訳』第6号:114-126, 第7号:120-135.
- 大久保和郎(1973)シンポジウム「翻訳の限界と可能性」『季刊翻訳』第1号:23-48.
- 小笠原豊樹(1973)「私の翻訳 ちょっとだけ」『季刊翻訳』第2号:184-185.
- 小中陽太郎(1973)シンポジウム「語学教育と翻訳」『季刊翻訳』第2号:33-60.
- 佐藤＝ロスベアグ・ナナ(2014)共振と呼応——1970年代日本における Translation Studies の芽生え『みすず』11月号:6-13
- 鈴木武樹(1973)「和訳と翻訳と——翻訳文体論序説」『季刊翻訳』第2号:70-79.
- 高橋健二(1973)「翻訳の役割」『季刊翻訳』第1号:2-5.
- 武富紀雄(1973)シンポジウム「翻訳の限界と可能性」『季刊翻訳』第1号:23-48
- ダスタエーフスキイ作、米川正夫訳(1914)『白痴』新潮文庫
- ドストエーフスキイ作、昇曙夢訳(1914)『虐げられし人々』新潮社
- ドストエーフスキイ作、中村白葉訳(1918)『ドストエーフスキイ全集(3)罪と罰』新潮社
- ドストエーフスキイ著、米川正夫訳(1917)『カラマーゾフの兄弟(上)』新潮社
- ドストエーフスキイ作、木村浩訳(1970)『白痴』(上)新潮文庫
- ドストエーフスキイ作、小笠原豊樹訳(1973)『虐げられた人びと』新潮文庫
- ドストエーフスキイ作、原卓也訳(1978)『カラマーゾフの兄弟』(上)新潮文庫
- ドストエーフスキイ作、江川卓訳(2007)ワイド版岩波文庫『罪と罰』(上)
- 外山滋比古(1973)「いったい誰のための翻訳か——翻訳の原点を求めて」『季刊翻訳』第3号:2-19.
- 中村白葉(1934)「翻訳文の表現と指導」『日本現代文章講座—指導篇—』厚生閣
- 原卓也(2000)「ロシア文学」『翻訳百年——外国文学と日本の近代』大修館書店
- 別宮貞徳(1973)「翻訳を考える」『季刊翻訳』第1号:6-22.
- 柳父章(1982)『翻訳語成立事情』岩波書店
- 米川正夫(1962)『鈍・根・才 米川正夫自伝』河出書房新社